

おひとりさま事例集（10） ～介護の担当者の性別～

今回の主人公は、20年以上前に夫に先立たれ、その後ずっと一人で暮らしている森田美恵子さん（83）です。

美恵子さんはこれまで、積極的なボランティア活動などを通じて地域に貢献し、地域に溶け込む生活をしてきました。

ところが、80歳を過ぎた頃から徐々に様子が変わってきました。突然、近所を歩いている若い女性に向かって大声で怒鳴りつける、ボランティア活動の日時を頻繁に間違えてしまう、郵便物の確認ができないなどの症状が散見されるようになりました。



これまで、ボランティア活動でお世話になってきた側の地域包括支援センターが、今度は美恵子さんの要介護認定を通じて、美恵子さんに恩返しをしようと動き出しました。

美恵子さんも納得して要介護認定を受け、ケアプランをもとに、訪問介護のヘルパーや訪問看護の看護師が自宅を訪問するようになるうちに、美恵子さんの認知症と思われる症状は徐々に進行していき、ある問題が浮上しました。

訪問介護、訪問看護、ケアマネ、地域包括担当者、このメンバーにひとりでも若手の女性がいると、美恵子さんがその女性に対し激しい暴言を浴びせるなど豹変してしまうのです。担当者が男性であれば、落ち着いた笑顔で「いつもありがとう」と感謝の言葉までかけてくださいます。

実は介護の世界では、こうした介護者の「性別」の希望の問題はよくあること。中にはセクハラ問題に発展するケースもあるので、性別の希望をすべて無条件に受け入れるべきではありませんし、人材不足によりそもそも要望に応えられるとも限りません。

しかし、介護される側の方が、例えば男性の介護者を強く希望する場合に、その裏側の事情を知ることは、その方のこれからの尊厳をお守りするためにとっても重要です。

ちなみに美恵子さんの場合、地域の方も知らなかったことですが、自慢の一人息子が30歳のときに精神を病んで自殺してしまったことが背景にあったようです。まだ結婚して数年しか経っておらず、将来を囑望された優秀な内科医であった息子さんをめぐって、同じ職場の女医であった息子の妻と美恵子さんとの間はかなり険悪になったそうです。

美恵子さんは、息子さんに先立たれたことや息子の妻との確執については、誰にも語らずに過ごしてきましたが、認知症の症状が出現したときに、過去に蓋をしたはずの感情が再び湧き出してきて、息子の妻を彷彿とさせる年代の女性を見ると感情が抑えられなくなってしまいます。

このような背景を知ると、介護する側の気持ちも変わってきます。こうしたことを、ご本人の気持ちに寄り添って吐き出していただくことも、私たちOAGライフサポートが出来ることだと思っています。